

昭和四十七年度

## 秋季公開講演会要旨

### 願生と未来

本学専任講師

本 多 弘 之

いわゆる聖道仏教が、日常生活の中に日日是好日の不動心を確立しようという立場に立ったのに対し、六道輪廻の危惧に苛まれ愛憎違順の凡情を断ちえない劣機の求めた浄土教は、不退を現生に望むべくもないならば、彼土において与えられんことを懇望した。切実な安心の境への願望は、具体的な罪惡生死の身のままに平安が与えられることなどは予想だにできない。日常茶飯事の中にさえ苦悩と不安に動揺する凡夫は、穢身の果てにのみかろうじて全存在の根源的な要求の満ちる日を待ち望んだのである。

しかるに無上菩提を願求する心は、涅槃界からの呼びかけに応答して、自己の生命の終りにその諾否をかけることに止まることができない。「我生欲国」と招喚する根源的な存在の祈りともいふべき切なる宗教心は、苦悩に生きている群生の上に平安の光明界を開かずば止まない。「欲生我国」の真実を開顕せずば止まない。法蔵の五劫をかけた思惟に顕現せる至心信樂欲生我国は、衆生の上に「願生彼国即得往生住不退転」として成就する。

願生心は、その心の根源に「欲生我国」の法蔵の悲心を承け

て、「不退転乃至無上正等菩提」（如来会）を得ることが出来る。不退転は、無上仏道を退かざる立場として、究竟菩提を正定する。「其有衆生、生彼国者、皆悉住於正定之聚」（十一願成就文）とは、願生心そのものが、「欲生我国」の勅命をうけて、願生の心そのものの内面に「得生者の情」（論註）を孕むが故である。しかし願生の位はどこまでも願生である。宗教的要求はどこまでも願生心として成就しようところにその特質をもつ。娑婆即寂光土というようなことは、云う必要がない。「穢身すてはて」ることが無い限り、涅槃界はあくまでも願生心に与えられる課題である。「生れんとするもの」（一多文意）のところに躍如としてはたらく欲生心がある。存在の根源意欲ともいふべき欲生心が、人間の存在構造の上に如実に相応して成就せんとするものが「生れんとする」心である。本願の成就は、願生彼国の心として我等の上に顕現する。

願生というところに、無限に宗教的要求を実現しつつある悲願の現成がある。そこに欲生我国の招喚の声がある。願生というところに、永遠に未来に呼びかける衆生の祈りと、絶対なる超越的世界が内在に自己を表現せんとする悲願との呼応がある。願生は、常に現前の一念の内景に後念即生の世界を展望する。常に現前の一念の中に純粹なる未来を呼びかける。「願生彼国」と「即得往生」は、願往生心の表裏である。善導のいう前念命終後念即生である。どこまでも純粹清浄の無限大悲を仰ぐ位にとっては、永遠に未来の課題たる涅槃界のはたらきにあふれるには、願生心の開示を待つほかない。願生を離れたる涅槃界は、死せる寂滅でしか

い。「必至滅度」の悲願は、正定聚に住するところに必成するといふのであるが、その正定が正定たることを得るのは欲生心の成就たる願生心にその不退の原動力を有するからである。

しかるに、自他平等の存在の故郷を発見せんとする願生心が、真に不退転の原動力たる為には、願生心が単に未来を孕むことにのみ止まるわけにいかない。願生心が単なる未来を開示せんとする方向のみであるならば、不退転をも未来において実現するという境位に安んじなければならない。必定を真に正定聚として実現し、その位に安住して不退転輪を転ずることをうる為には、願生心が過現未の三世の課題を受けて、その一切を純粹未来の世界に開放するようなところを有たねばならない。その為に、因位本願における欲生心は、「至心発願」「至心廻向」「至心信樂」という三願の歷程を説いて、願生心に求道の立体的深まりを教示せんとする。

至心発願から至心廻向をすることによって、未来に理想郷を希望するような甘さを残した宗教心の深底に、一方では自己の生命の危機たる臨終を実感し、他方では現存在の背景に宿業といわれる如き不如意にして逃れえざる限界を知知して、発願より廻向への求道心がもつ立場の極限にぶつからざるをえない。未来が過去をうけたる現在の延長にある限り、質的な飛躍を未来に望むことの無意味さが顯現する。いわば無上菩提心の頽落としての願生心（厭離を先とする願生心、親鸞の所謂横出の菩提心）がその願生そのものにさえ行詰る。そこでは、未来が現在の内容となつて現在を支える如き、不退の地盤となることができない。

そこを突破せしめるものが、欲生心自身の展開として表現されたる「至心信樂」であろう。どこまでも未来に願をかける外ないような存在が、未来に真実にその存在の成就をかけうる為には、現在が満足成就の根拠を有たねばならない。その為には、未来が現在の延長の中に待ち望まれる如き深いロマンの故郷に止まることであつてはならない。未来が現在を真実に現在一念の中に満足せしめるような基底としてはたらいてこなければならぬ。彼岸として象徴されたる存在の故郷としての涅槃界は、単なる未来の国であることを自ら截断して、現在の基底とならなければならない。

至心廻向として表われたる欲生心は、それ自身の内から欲生を實現せしめるために信樂を開かねばならない。その為には廻向そのものを一度び否定して、不廻向という立場を公開する。欲生心の階程としての廻向は、自らを否定して、不廻向を表現し、そこに改めて至心信樂の成立を確認する。

しかれば、「諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念」が、至心信樂欲生の因願の成就として定立されうる為には、「至心廻向」そのものが再び肯定的に訓み直されなければならないわけである。「至心に廻向したまへり」との親鸞の成就文についての訓は、未来への慕情に積極的な宗教心の意欲を汲みとりつつも、それが単なる未来への願望に止まることなく、現在に正定の境位を開示する原理を発見せしめんとする仏願の道理に従つたものといふべきである。「信心歡喜乃至一念」として現在に存在が満足功德大海の歡喜を有して、一念のところに欲生心が成就するということ

は、いわば願生心が、宿業の過去と不安なる未来の唯中に安住の現在を発見することである。過去と現在の一切を捨てて未来へ手向けんとする衆生の切なる願心を通して、欲生心が真に現在に呼びかける為には、廻向そのものを一度全面的に否定せしめる。否定せしめる力としての欲生心は、真に願生即得生として、凡情を否定しつつその凡情に即して彼岸の涅槃界を明示する為に、衆生の上に願生心と呼び起す。衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心（觀經疏）とは、無量清淨平等の願海が、孤独無救なる衆生の上に、各々安立の世界を与えんが為の悲心の表現である。独尊子としての妙好華の意義を、貪瞋の身に表明せしめんが為に、廻向心が因果の方向を転ずるわけである。従因向果を成立せしめる根底に従果向因を見出すのである。

欲生が発願・廻向を翻転して、信樂の一念を獲得するとき、その欲生は、自ら「諸有の群生を招喚したまう勅命」（信卷）である。而してそれこそが廻向心である。その故に「至心に廻向したまへり、彼の国に生れんと願すれば、即ち往生を得て不退転に住せん」という經文は本願欲生心成就の文でありうるのである。願生心が住不退転を能動的に支持する源泉であることをうるのである。不退が無上仏道に無量劫をかけても退転せざる志願を意味する限り、住不退転の確立は仏道の必須要件である。しかも無限の時の重みに耐えるということは、念々に迫り来る未来の不安を抜本的に截断しなければならない。横截五惡趣の根本原理ともいうべきものは、單なる業惑の三世における未来にはあるべくもない。しかも愚凡の身にかろうじて光明界を望まんとするならば、過去

の重荷と現在の束縛の中によりは、可能性として存する未来に、淡い切なる願望を祈念するほかない。欲生心はその切なる苦惱の衆生の生死海の唯中に自己を実現せんとする大悲心である。一切を捧げんとする廻向は、実は貪瞋の身から行ぜられ成就されるものではなく、貪瞋の身のところに清淨心自身が一切を捧げ尽すことによって成就しうるものである。しかれば空間的に表象された彼岸をして、時間的に未来に願生せしめんという經文の意図には、「未來世」の衆生という受法の機類をも含めて、普共諸衆生の悲心があるとするべきである。

願生心有する未来の課題は、どこまでも未来の課題として推究すべきものがある。現在の一念は、願生心を離れて成就するものではない。信樂は、字訓釈に見られる如く、「信」において真実誠満であつて、同時に「樂」において欲願愛悦である。仏意釈に見られる如く、「如来の満足大悲円融無碍の信心」でありつつ、「如来の大悲心なるが故に必ず報土正定の因と成る」のである。円融満足しつつ「必成」として念々に成りつつ、往きつつあるのである。

生死するものは、生から死への不安の存在の唯中において、死によって生の尊嚴性を与えられる。煩惱の衆生は未来の彼岸として表現されたる涅槃界によつて、必定仏道の地位を付与される。願生心が、飽くまで願生心として止まざることこそが、信樂に不退たることの意味である。願生を離れたる信樂は、本来清淨の悲願の欲生心を見失つたものというべきである。信樂を体として欲生も成就することは無論であるが、逆にまた欲生を離れて信樂が

成立するわけではない。信樂が不退転地を開く道理がない。願生心の根源としての欲生心こそを、廻向心と云われた親鸞の深意を思わねばならないのである。

## 天台の神通義

本学専任講師

福島光哉

天台智顗（五三八―五九七）の法華学上における神通の解釈を求めるのがこの課題であるが、とくに彼の法華經の原理に基づく実相論や法界觀と諸仏菩薩の神通示現の關係が、いかに統合せられているかの点について考察を試みようと思う。

中国六朝時代の法華思想として、一つには竺道生、道融、法雲などのように主として法華經の開三顯一など原理的な理論研究に基づくものがあつたが、いま一つには法華經を誦誦・書写し、或いは觀音信仰や普賢信仰として法華經を実践することを主とするものがあつた。中でも觀音信仰は僧俗を問わず、南北兩地にかなり早くから行なわれていたことは各種の僧伝や法華伝類によつて知られる。觀音信仰は普門品によると、衆生が各種の災害や疾病に陥つたときに、一心に觀音菩薩の名を称えるなど身口意の三業をもつて供養すれば、觀音菩薩の神通力によつて衆生の七難を消滅し、また觀音は三十三身をもつて普門示現するという。當時の人々は、經説の如く現実の苦悩災厄を逃れるために、奇蹟的、神秘的な觀音菩薩の神通にすがつて安らぎを得ようとする素朴な信仰を抱いていた。また普賢勸発品や觀普賢經によると、一心に法華經の文句を専念すると普賢菩薩が色身となつて六牙の白象に乗つて行者の前に現われ、金剛の杵をもつて行者の眼を擬すれば障